

『マクベス』

——運命との対決——

徳 見 道 夫

序

マクベスにとって、他のどの殺人よりもダンカン王殺害が重大な意味を持っていることは明白である。何故なら彼はこの殺人によって言わば悪の洗礼を受け、これ以後は悪の道を死ぬまで走り続ける運命へと追いやられるからである。『マクベス』に於る悪は、主人公マクベスの意志など全く無視して、彼に次々と犯行を重ねさせて行く。このことをL. C. ナイツは「悪の自動作用」と定義しているが、¹⁾確かにマクベスは、ダンカン王殺害の後には、何か超自然的なものに急き立てられるようにして、悪事を遂行しているような印象を我々に与える。ダンカン王殺害の時には、まだ彼の心の中には行動への逡巡が見られ、彼が殺人という罪を犯して王座を得ようと決意するためにはマクベス夫人の持つ強烈な個性の力が必要であった。夫人はA. C. ブラッドリーも認めているように、²⁾極端に想像力の乏しい女性であり、自分が何を言っているか、またどのような行為に夫を駆り立てているのか全く理解できないのである。それゆえダンカン王殺害の後、彼女はあれほどの事後処理能力を発揮し得たのである。ただ彼女がダンカン王を自分の手で殺害できなかった事実は、彼女が自分の行為に気付き始めたことを如実に示している。しかし最初の殺人の時、夫人の個性の力に頼ったマクベスも、悪の自動作用に捕えられてからは、夫人の助けを借りずに悪事を重ねて行くのである。後でも述べるが、マクベスの心の中には殺人を犯すことを妨げる人間的な感情が豊富に存在しているのである。

I am in blood,

Stepped in so far that, should I wade no more,

Returning were as tedious as go o'er.... (III. iv. 136-138)³⁾

という彼の言葉が示しているように、マクベスを取り巻く悪の力は強大なものである。悪の歯車

1) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes and An Approach to Hamlet* (Penguin Books Ltd., 1966), p. 117.

2) A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan & Co. Ltd., 1969), p. 313.

3) J. Dover Wilson (ed.), *Macbeth* (Cambridge University Press, 1971) 以下『マクベス』からの引用は全て上記の版からのものである。

は魔女の持つ超自然的な力とマクベスの心の中に存在する野心と夫人の強力な個性との結合によって、一旦回転し始めると、それは彼の意志など度外視して、それ自体の回転運動を続けて行くのである。このようにして、マクベスはダンカン王を殺害することにより悪の自動作用に陥り、

They have tied me to a stake; I cannot fly,

But, bear-like, I must fight the course. (V.vii. 1-2)

と彼も言っているように、自分の意志はどうであれ定められた悪の道を最後まで辿らなければならないのである。本論文に於ては、『マクベス』に於る悪を中心にして、マクベスの心理的葛藤を追求してみたい。

第一章

D. A. トラバーシは、マクベスに自由意志が与えられていたと評し、彼がダンカン王を殺害したことは彼が自分の自由意志を“nature”と対立する方向に行使したに過ぎないと言っているが、⁴⁾果してマクベスに自由意志が与えられていたであろうか。マクベスは彼の心の奥深く潜む王権への野望と魔女の持つ超自然的な悪の力と強烈な個性を持った夫人のために、最初から悪の世界へ参入する運命に定められていたのである。彼が自分の自由意志を問題にし始めるのは、むしろダンカン王殺害の後のことで、彼が悪とそれが織りなす運命に唯々諾々として従うことを拒否し、未来を自分の思い通りに動かそうと決心した時、彼にとって自由意志が大切なものとなる。ダンカン王殺害は彼の野心と魔女と夫人に、言わば引き擡られて彼は犯すのであって、彼が自由意志を行使する余地は全く存在し得ないのである。確かに彼はダンカン王殺害の計画を中止するよう夫人に提案するが、彼の言葉の何と弱々しいことであろうか。あたかも彼は夫人に説得されるのを待っているような印象を我々は抱く。⁵⁾ 実際 “If we should fail?” (I.iii.59) と彼が言った時にすでに彼は夫人によってダンカン王殺害を説得されているのである。またマクベスが “So foul and fair a day I have not seen” (I. iii. 37) と言って登場してくる時、最早彼は魔女の “Fair is foul, and foul is fair” (I. i. II) というこの世の価値観の全く通用しない世界に捕われていたのである。一幕三場で魔女の予言を聞いたマクベスは自分の奥底

4) D. A. Traversi, *An Approach to Shakespeare vol. I* (Doubleday & Co. Inc., 1956), p. 139.

5) K. ミュアはこの点に関して次のように述べている。(Kenneth Muir, *Shakespeare's Tragic Sequence*, Hutchinson & Co. Ltd., 1972) “She manoeuvres her husband into a position that a refusal to kill the king will show that he is inconsistent, cowardly, lacking in ‘manliness’ and, above all, lacking in love for her” (p. 147).

に潜む野望を言い当てられ驚愕する。彼はこの時からダンカン王殺害という忌わしい思いに囚われ、魔女の影響の下に行動せざるを得なくなるのである。

Good sir, why do you start, and seem to fear

Things that do sound so fair? (I. iii. 51-52)

というバンコーの言葉は、マクベスが自分の野心の本体に気づき茫然としている様子をよく表現している。この劇の最初から悪はマクベスの心の中に着実に侵透して、彼を悪の世界へと誘惑して行くのである。『マクベス』の悪とは、上記の論述から明白なように、人間性の否定であり、魔女の言葉が示しているように、単調な言葉の繰り返しによって人を単一的な思考へと駆りたてる運命の機械的非人間的な作用である。魔女との出会いからマクベスは、あたかも催眠術にかかったような非現実的世界へ参入するのである。この『マクベス』に於る悪はマクベスよりも夫人により強い影響を与える。彼女はこの超自然の悪の影響のもとで、自分の持つ自然な女性らしい特質を投げ打って、マクベスよりもより直線的に悪の世界へ入って行くのである。

第二章

だがマクベスがダンカン王殺害を決意することを妨げるものが存在する。それはマクベス夫人の言う“the milk of human kindness”(I. v. 16)であり、彼の心の中に存在するあまりにも人間的な感情である。K. ミュアも述べているように、⁶⁾『マクベス』に於る「ミルク」のイメージは「光」や「赤ん坊」のイメージと結びついて、温い人間的感情を象徴しており、また上に述べた悪の機械的非人間的な作用とは対照的な成長発展し流動的な人間の根元的生命力をも表現しているのである。それゆえマクベスがダンカン王を殺害することは、彼に内在する人間的感情の流露を抑圧し、機械的非人間的な悪とそれが作り上げる運命に自分の心を委ねることに他ならない。この根元的生命力を抹殺しようとするのが如何に残酷な所業かをシェクスピアは夫人の口を借りて次のように表現している。

I have given suck, and know

How tender 'tis to love the babe that milks me ——

I would, while it was smiling in my face,

Have plucked my nipple from his boneless gums,

And dashed the brains out.... (I. vii. 54-57)

彼女の言葉は人間性に対する冒瀆である。母性の否定は全ての生を否定することになるのである。

6) Kenneth Muir, “Image and Symbol in ‘Macbeth’”, *Shakespeare Survey* 19 (1966), 46.

結局マクベス夫人が夫を駆り立てている目標は、彼の心の中に存在する人間本来の感情を消滅させ、『マクベス』に於る悪の機械的非人間的作用に魂を売り渡すことである。このことをマクベスは明確に認識していないが、ぼんやりと事の重大性に気付き、

I dare do all that may become a man ;

Who dares do more is none. (I.vii. 46-47)

と夫人に反論する。しかし野心に目の眩んだマクベスは自分がどのような罪を犯すのか半ば悟りながら、悪の誘惑へ魂を売り渡すのであり、この点ではC. マーロウの描くファウスト的である。マクベスは意識的に悪を選ぶのである。⁷⁾ しかしながら彼の中に存在する流動的生命力に対する希求は決して消えることはない。何故ならそれは人間の存在を支えている根元的なものだからである。それゆえダンカン王殺害の後には彼の心に機械的な悪と人間的生命力との深刻な葛藤が生じてくるのである。マクベス夫人は夫がダンカン王殺害を決行している時、いみじくも彼の葛藤を暗示的に次のように表現している。

I have drugged their possets,

That death and nature do contend about them,

Whether they live or die. (II.ii. 6-8)

ここでは“death”は機械的非人間的な運命の作用を表現し、“nature”はマクベスの心の中の根元的生命力を示しているのである。

W. ファーナムはマクベスの良心は不完全であったと評しているが、⁸⁾ マクベスに同情的な見解をすれば、彼を取りまく悪の力があまりにも強大だったからであり、それは悪と結びついている闇のイメージが『マクベス』の世界を覆い尽くしていることから明らかである。周知のように、『マクベス』に於ては光と闇のイメージが対立的に用いられており、勿論闇が圧倒的な力を持ち、光はその闇の力を浮び上がらせる補助的手段にしかすぎないように思われる。しかしたとえ存在は希薄であっても光のイメージは『マクベス』の世界に確実に存在しており、それは一幕六場でバンコーによって詩的に表現されている。

This guest of summer,

The temple-haunting martlet, does approve,

By his loved mansionry, that the heaven's breath

Smells wooingly here : no jutty, frieze,

7) この点に関して R. B. ハイルマンは次のように述べている。(Robert B. Heilman, “The Criminal As Tragic Hero: Dramatic Methods”, *Shakespeare Survey* 19) “...but when we share the point of view of Macbeth, we have to experience the deliberate choice of evil” (13).

8) Willard Farnham, *Tragic Frontier* (Basil Blackwell & Mott, 1973), p. 107.

Buttress, nor coign of vantage, but this bird
Hath made his pendent bed and procreant cradle :
Where they most breed and haunt, I have observed
The air is delicate. (I. vi. 3-10)

バンコーのこの言葉は根元的生命力の豊饒を暗示しており、またこれからマクベスの居城で起る怖ろしい出来事と強烈な対照をなしている。この光のイメージはマクベスの心の中の“the milk of human kindness”と呼応して、彼が殺人を犯すことを妨げている。光のイメージはまた赤ん坊のイメージと結びついており、C. ブルックスは次のように赤ん坊のイメージを解明している。

The babe signifies not only the future; it symbolizes all those enlarging purposes which make life meaningful, and it symbolizes, futhermore, all those emotional and —— to Lady Macbeth —— irrational ties which make man more than a machine —— which render him human.⁹⁾

第 三 章

一方闇はマクベスの心の中にこれまで抑圧してきたが魔女によって触発されて浮び上がった野心という型で存在する。『マクベス』の世界が光と闇との相剋で包まれているように、主人公マクベスの心の中にも生を育み肯定する力と全てのものを破滅に追いやる“the instruments of darkness”(I. iii. 124)との深刻な対立がダンカン王殺害の後に演じられることになるのである。彼が自分の根元的生命力への希望が簡単に抑圧できると思ったところに、彼の誤算があった。それゆえ彼が聞く超自然の声、

Methought I heard a voice cry ‘Sleep no more!
Macbeth does murder sleep’ ——the innocent sleep,
Sleep that knits up the ravelled sleave of care,
The death of each day’s life, sore labour’s bath,
Balm of hurt minds, great Nature’s second course,
Chief nourisher in life’s feast.... (II. ii. 35-40)

は、彼がこれから受ける深刻な精神的葛藤のために心の真の平安を味わうことができないことを暗示している。大山敏子は『シェクスピアの心象研究』に於て、“sleep”と“death”のイメージ

9) Cleanth Brooks, *The Well Wrought Urn* (Harcourt, Brace & World, Inc., 1947), p. 46.

は結びついており、『マクベス』の世界に存在する光と闇のイメージは“sleep”に於て一つの接点を作り上げていると述べているが、¹⁰⁾ マクベスにとって“sleep”と“death”は決して結びつかないものである。何故なら彼は自分でも“My eternal jewel/Given to the common enemy of man”(III. i. 67-68)と語っているように、彼にとって死とは眠りの示す心の平安とは決して同一のものではないのである。¹¹⁾ ダンカン王殺害という大罪を犯した彼には死後の平安を期待できないことは明白である。それゆえ彼の言う“sleep”は心の平安であり、生きている間も死後にも彼にはそれを味わうことができないことを彼は悟ったのである。マクベスはマルカムの述べるように“I should/pour the sweet milk of concord into hell”(IV. iii. 97-98)したのであり、ダンカン王殺害の後にはたとえ彼が死んでも心の真の平安は決して訪れないのである。これまで彼の心は、“milk”のイメージの示す流動的な人間の生命力によって統一され、彼はそれによって生きる喜びと充実感を与えられていたのである。ダンカン王殺害とはこの大切な存在意義を抹殺し、彼自身を巨大な虚無の中に陥し入れることを意味しているのである。

第 四 章

更にマクベスの心の中の光と闇の深刻な相剋は、象徴的に彼が短剣の幻影を見る場面にも示されている。これは彼の無意識層に潜む権力への野心が“the milk of human kindness”を抑圧しようと試みた結果に他ならない。もし彼が短剣の幻影によってダンカン王の寝室へと駆け立てられなかったならば、これほど迅速に殺人が決行できたかどうか疑わしい。おそらく彼も夫人と同様自分の心の中の人間性に気付きそのような残酷な行為はすぐにはできなかったであろう。それゆえこの幻影によってマクベスは自分の内部に存在する倫理観を抑圧せざるを得なかったのである。しかし短剣の幻影が消えダンカン王を殺害した後に、彼の心の奥に存在する生を育み肯定する希求が甦り、自分の犯した罪に慄然として、深い後悔の念に打たれる。

10) 大山敏子、『シェクスピアの心象研究』(篠崎書林, 1966), pp. 141-142

11) ダンカン王にとっては勿論“death”と“sleep”のイメージは容易に結びつく。何故なら彼はマクベスも認めているように高德な人物だからである。それゆえマクベスは死んだダンカン王を羨むのである。

Duncan is in his grave;

After life's fitful fever he sleeps well;

Treason has done his worst: nor steel, nor poison,

Malice domestic, foreign levy, nothing,

Can touch him further. (III. ii. 22-26)

12) この時彼も“Now o'er the one half-world/ Nature seems dead...”(II. i. 49-50)と言っているように、闇のイメージはここに一つの頂点を迎え、それと同時に彼の心も悪一色に塗りつぶされているのである。この悪の影響の下に、マクベスは現実と夢の境界で殺人を行う。

But wherefore could not I pronounce ‘Amen’ ?

I had most need of blessing, and ‘Amen’

Stuck in my throat. (II. ii. 31-33)

「私が最も神の祝福を必要としていた。」という言葉に示されているように、マクベスが自分の犯した罪に対して正確な認識と強い後悔の念を持っていたことは明白な事実である。この事実が彼を単なる悪漢に陥ることから救い、我々の同情と共感が彼から離脱して行くことを防いでいる。バンコー殺害の後にも彼は良心の苛責のかわりに、その変型とも言うべきバンコーの亡霊に悩まされている。何故なら彼は良心を完全に意識下に押しやったので、良心は彼の意識を経ず無意識から彼に呼びかけているのである。このように確かにマクベスは悪人（罪を犯したという点に於て）であり、我々の眼前であるいは舞台裏で数々の非道な行為を重ねて行くが、不思議なことに我々に反発を感じさせないのは、彼が自分の犯した罪を深く後悔し苦悩しているからである。しかしマクベスの良心の苛責、深い精神的苦痛など全く意に介せず悪の自動作用はそれ独自の運動を続けて行くのである。勿論罪への認識とそれが生み出す苦悩が、彼の犯した罪を帳消しにすることは決してあり得ない。だから彼は最後にはマルカムの率いる軍隊によって悲劇的な死を遂げなければならないのだ。この罪への認識を彼に強く迫るのは、これまで述べてきたように、彼がどうしても沫殺できなかった“the milk of human kindness”である。すなわち良心の苛責をマクベスの心に生み出しているのは、彼の内部に存在する“milk”に象徴され彼に存在意義を与える根元的生命力である。それは全ての生を肯定するがゆえに殺人を人間性に対する最も重い冒瀆であるとし、マクベス自身もそのことを悟ったので自分の犯した罪に戦慄するのである。しかもマクベスも認めているようにダンカン王は高潔な人物であり、また彼の主君でもある。¹³⁾ それゆえマクベスの精神的葛藤は彼が悪に染まり切れず、悪と対立する人間的感情を最後まで保ち続け、悪の機械的な奴隷となり得なかったところから生まれてきたものである。悪の奴隷となるには彼もまたあまりにも高潔な人間である。¹⁴⁾ 彼がバンコー殺害の直後に見る亡霊も、彼が“milk”に象徴される生の全てのものに対する肯定的精神を捨て切れなかったからである。

13) マクベスはダンカン王について次のように述べている。

Besides, this Duncan
Hath borne his faculties so meek, hath been
So clear in his great office, that his virtues
Will plead like angels, trumpet-tongued, against,
The deep damnation of his taking-off.... (I. vii. 16-20)

14) このことはマクベスとリチャード三世とを比較すればもっと明瞭になろう。リチャード三世はあたかもスポーツのように悪事を重ねて行き、全くマクベスのような精神的苦悩を味わうことはない。

My strange and self-abuse

Is the initiate fear that wants hard use:

We are yet but young in deed. (III.iv. 142-144)

とマクベスは自嘲するが、彼が一片の人間性を心に宿している限り、バンコーの亡霊は幾度となく彼の眼前に出現する可能性を持っているのである。何故ならバンコーの亡霊はマクベスの生の否定に対する彼の内心に存在する“milk”の強烈な復讐だからである。

だがマクベスはダンカン王殺害によって、人間に存在意義を与えている流動的な生命力に取り返しのつかない打撃を加え、彼の内的統一を失ったことは事実である。それゆえ彼は“Tomorrow Speech”の中に示されているように、人生に対して深い虚脱感を味わうようになってくるのである。自分の生命の核を窒息させておいて果して何の生き甲斐がマクベスにあるだろうか。“To-morrow, and to-morrow, and to-morrow”(V. v. 19) という単調な言葉の繰り返しに注目してみよう。マクベスにとって未来とは単調な時の繰り返しにすぎない。何故なら彼に存在意義を与えていた成長発展的な生命の核は、彼の心の中で半ば窒息状態となっているからである。次に引用する彼の独白はこの間の事情を明白に物語っているものである。

Life's but a walking shadow, a poor player

That struts and frets his hour upon the stage,

And then is heard no more: it is a tale

Told by an idiot, full of sound and fury,

Signifying nothing. (V. v. 24-28)

マクベスにとってこの事実は当然の結果である。王座を得たいという野心のために、自分の内心に存在する根元的生命力を抑圧した彼には人生を意義あるものにすることができないのは当然である。夫人の死を聞いてマクベスは何の感情も交えず、

She should have died hereafter;

There would have been a time for such a word. (V. v. 17-18)

と語る。この言葉は遠からず自分の精神的死と同時に肉体的死を迎えるかもしれないという彼の悲惨な予感を示している。このようにして『マクベス』は光のイメージで終るが、マクベスの心の中の光と闇の相剋は闇の圧倒的勝利に終るのである。

第 五 章

だが果してマクベスは悪の持つ強大な力に一方的に振り回されただけであろうか。アンガスは着物のイメージを用いて、

...now does he feel his title

Hang loose about him, like a giant's robe

Upon a dwarfish thief. (V. ii. 20-22)

と言っているが、本当にマクベスは卑少な人物なのであろうか。D. A. トラバーシもマクベスの最後を偉大な人物として考えることに反対し次のように述べている。

To this end, we need to avoid above all the temptation to sentimentalize Macbeth in the hour of his downfall, regarding him primarily as a brave warrior making his last stand against hopeless odds.¹⁵⁾

たしかに彼は“I cannot fly”(V. vii. 1)と象徴的に語っているように、悪とそれが作り出す運命の力に抵抗できないことを告白しているが、彼の運命に対する態度は明らかに挑戦的である。C. ブルックスも認めているように、¹⁶⁾マクベスの偉大な点は、彼が自分の運命を知っていてもなお未来を自分の意志で開拓しようとしたことである。強力な悪の力の影響を受けながらも、内心では悪に対抗しようとするマクベスに我々は深い同情と共感を禁じ得ない。この運命との苛酷な闘争は彼をイーディプスのような苦悩へと導いて行く。イーディプスは自分の両眼を潰すことによって自分の運命を見ることを拒否したが、マクベスは最後まで自分の運命と対決する態度を崩さない。魔女の予言から裏切られたマクベスは、

Ring the alarum bell! Blow, wind! come, wrack!

At least we'll die with harness on our back. (V. v. 51-52)

と言って、自分から進んで戦場に臨みマクダフと会う。彼は自分がこの“Untimely ripped”(V. viii. 17)された男に殺される運命にあることを自覚するがそれでもなお彼は、

Though Birnam wood be come to Dunsinane,

And thou opposed, being of no woman born,

Yet I will try the last. (V. viii. 30-32)

と決意して、最後まで運命と争う態度を固守するのである。彼はダンカン王殺害によって、自分

15) D. A. Traversi, p. 138. C. F. E. スパージョンもこの見解に賛成しており、次のようにイメージの研究から得た結論を述べている。

(Caroline F. E. Spurgeon, *Shakespeare's Imagery*, Cambridge University Press, 1971) “But he could never be put beside, say Hamlet or Othello, in nobility of nature; and there is an aspect in which he is but a poor, vain, cruel, treacherous creature, snatching ruthlessly over the dead bodies of kinsman and friend at place and power he is utterly unfitted to possess” (p. 327).

16) Cleanth Brooks, p. 40.

の流動的生命力に打撃を与え内心の統一を失い、自分の存在意義を失ったのに、何故自分の運命にこれ程の敵意を見せ続けるのであろうか。それは勿論表面的には自分の王座を不動のものにしたいという彼の欲望のためでもあるが、彼の心のより深い欲求としては自分の精神的死を怖れたからに他ならない。換言すれば、前にも述べたように彼は無意識のうちに運命の機械的非人間的作用に自分の全存在を委ねることを拒否したのである。人間的な感情を全く考慮しない悪とそれが作り出す運命の自動的なメカニズムと人間的な感情を豊富に持つマクベスとの軋轢。これがマクベスの心に恐怖と絶望感を作り出しているものである。魔女の予言通り自分の将来が決まってしまう行くことを拒否した彼は運命との血みどろの闘争を開始せざるを得ないのである。このような彼の運命に対する抵抗がダンカン王殺害の後の彼に存在意義を与えているように思われる。内心にある生命の核を抑圧した彼は抵抗そのものに自分の存在意義を確認していたのである。ダンカン王殺害の後の彼の素早い殺人は自分の存在意義を見失うまいとするマクベスの必死の努力である。F. ターナーは、

If the future is known, it cannot be altered by free-will; the ignorance which living in the present seems to entail is part of our liberty. ¹⁷⁾

と言って、「未来への無知」が人間に自由を与え得ると述べているが、人はたとえ未来を知っていても自分の将来は自分で開拓しているという実感が伴わなければ充実した生は送れないのである。それゆえマクベスが自己の内心の統一を失い生命の充実感を失った時、運命との争いに自己の存在意義を見出そうとしたことは当然の成行である。マクベスにとって殺人とは生きる証しなのである。殺人によって彼は自己の内心の統一を取り戻そうとしているのである。G. W. ナイトもこの事実を認め次のように述べている。

He has won through by excessive crime to a harmonious and honest relation with his surroundings. He has successfully symbolized the disorder of his lonely quest-stricken soul by creating disorder in the world, and thus restores balance and harmonious contact. ¹⁸⁾

第 六 章

運命に対する受身的態度は精神的死を招きやすい。マクベスとは対照的にマクベス夫人はダンカン王殺害の時もその後も、終始一貫して運命に抵抗する意志を持たなかった。いやむしろ彼女

17) Frederick Turner, *Shakespeare and The Nature of Time* (Oxford University Press, 1971), p. 142.

18) G. Wilson Knight, *The Wheel of Time* (Methuen & Co. Ltd., 1949), p. 156.

は悪の持つ非人間的作用に積極的に自分の全存在を委ねてしまったのである。

Come to my woman's breasts,
And take my milk for gall, you murd'ring ministers,
Wherever in your sightless substances
You wait on nature's mischief!

という彼女の言葉は上記の事実を最も明瞭に示している。彼女は夫の持つ王権が確実なものではないことに焦りを感じつつも、¹⁹⁾マクベスがバンコー殺しを仄めかした時、“But in them nature's copy's not eterne” (III. ii. 38) と言って積極的に運命の流れを変えようとはしない。夫人にとって未来とは決して変えることのできない固定的な存在であり、これは彼女が悪の持つ非人間的機械作用に巻き込まれたことを示している。それゆえ彼女は自分の存在の核を失い、人格の崩壊という悲惨な結末を迎えることになるのである。

しかし、マクベスは自己の精神的死から逃れるために運命との抵抗の中に自分の存在意義を見出したが、巨大な悪の力と較べればマクベスの抵抗も何と弱々しいものであろうか。いやむしろ彼の反抗そのものが彼の運命の成就に加担しているのである。換言すれば、マクベスは自分自身の自由意志で行ったと思っていた行為が、実は巨大な運命という歯車の一つを構成しているにすぎないのである。ここにマクベスの悲劇的状況が存在する。運命の実体とは抵抗すればするほど深くその作用に巻き込まれる不条理性である。しかしマクベスは自己の存在意義を見失うまいとして、この巨大な運命の作用に一人で立向うのである。マクベス夫人はダンカン王殺害の後には、最早彼の頼みにはならない。この悲劇的状況の中で、彼は血に染まることによって、辛うじて自己の存在を支えているのである。K. ミュアは、

This state of insensibility is a sign that Macbeth has succeeded in deadening his conscience. His fears had continued as long as he was wrestling with evil and critics who think of him as going beyond good and evil have distorted the meaning of the last act of the play, Macbeth's freedom from fear is also a freedom from feeling.²⁰⁾

と述べてマクベスが、

19) マクベス夫人の焦りは次の言葉にも見られるが、彼女は自分の運命に従順であり、マクベスとは対照的である。

Nought's had, all's spent,
Where our desire is got without content :
'Tis safer to be that which we destroy
Than by destruction dwell in doubtful joy. (III. i. 4 - 7)

20) Kenneth Muir, *Shakespeare's Tragic Sequence*, p. 150.

I have supped full with horrors;
Direness, familiar to my slaughterous thoughts,
Cannot once start me. (V. v. 13-15)

と言った時、自分の良心を殺したから恐怖を感じなくなったのであると評している。だがマクベスのこの無感覚はもっと根の深い所から発しているように思われる。彼が最早恐怖を感じないのは、彼は自分が闘っている運命の巨大な力を徹底的に認識したからである。自分の抵抗も運命の歯車に組み込まれるような不気味な作用の存在を認識したマクベスは通常の恐怖ではなく、無感覚の精神状態に陥って行くのである。それでもマクベスは運命との対決を止めない。それは絶望的な勇気というより、²¹⁾彼の自己の存在意義を固守しようという必死の努力なのである。自分の行為が運命の成就に加担していることを知った後でも、マクベスは抵抗を止めない。それは機械的非人間的な運命の作用に最後まで勇気と人間的誇りを示したいがためである。これが彼の最後の願いなのである。

At least we'll die with harness on our back. (V. v. 52)

——終り——

[論文受理 51. 9. 16]

21) マクベスの最後の勇気は真の勇気ではなく偽りの勇気であると L. B. Campbell は述べている。(Lily B. Campbell, *Shakespeare's Tragic Heroes*, Methuen & Co. Ltd., 1970) "But here again he fights irrationally, not with the fortitude of the man controlling his passion by reason, but rather with the courage of the animal that fights without reason when there is no choice but to fight for its life" (pp. 236-237). この見解が如何に一面的なものであるかを本論文は証明しようとしたものである。